

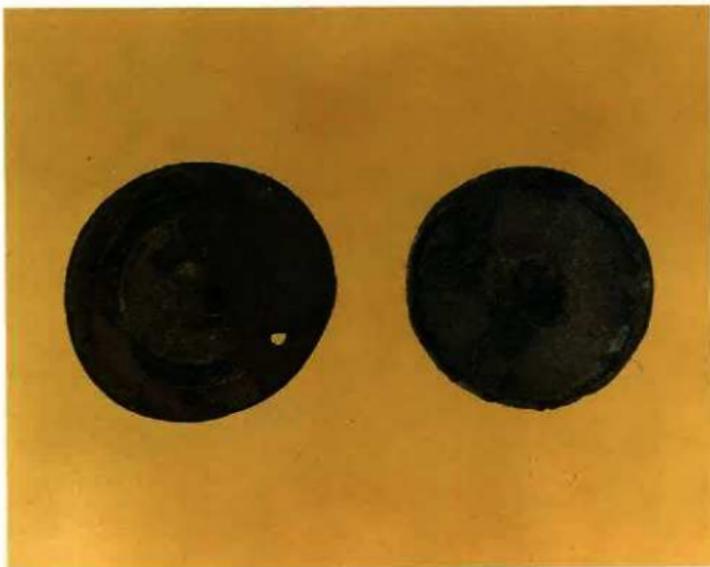
高 溝 遺 跡

1990

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

卷首図版



高溝大井地区出土の鏡

高 溝 遺 跡

1990

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、地理的環境にめぐまれたのどかな田園地帯であります。一方で先人の残した遺跡が多いところであります。このたび報告をいたします高溝遺跡も縄文時代から平安時代におよぶ複合遺跡として周知されており、調査によってその実態が少しづつ解明されてきました。

これらの埋蔵文化財は、わが町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産であり、これら貴重な文化財を後世に伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であるといえます。

この報告が、地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために、幾分でも寄与するところがあれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました地元関係者、関係諸機関に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例　　言

1. 本書は滋賀県坂田郡近江町内における県営は場整備事業（天の川東部地区、高溝頬戸工区）に伴う埋蔵文化財（高溝遺跡・頬戸遺跡・法勝寺遺跡）の発掘調査の報告書3分冊中の一冊である。

2. 当整理調査に伴う報告書の名称は以下の3分冊である。

「近江町文化財調査報告書第4集　　高溝遺跡」

「近江町文化財調査報告書第5集　　頬戸遺跡」

「近江町文化財調査報告書第6集　　法勝寺遺跡」

3. 発掘調査は昭和61年度より昭和63年度まで実施、平成元年度に整理調査を実施した。

4. 調査は滋賀県の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体　　近江町教育委員会　　教育長　木田源三郎

調査事務局　近江町教育委員会　社会教育課　次長　土川恵章

(昭和61年度)

課長　須戸茂樹

(昭和62年度以降)

係長　世森增信

技師　中川通士

宮崎幹也

(平成元年度)

調査員　　高居芳美

調査補助員　小野梅子

整理作業員　須藤源隆、久保田稔、田中正義、広瀬清左エ門、広瀬長吾、
村岡勝次、北居憲治、粕淵紀代子、粕淵早苗

5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

江谷 寛、渡辺 誠、水野正好、千葉 豊、中井 均、植田文雄、
中村健二、南 孝雄、中川治美
(順不同、敬称略)

6. 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIによった。また標高はTP(東京湾平均海面高度)を用いた。

7. 本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査の経過	5
第4章 調査の結果	5
第1節 ニエダ地区	5
第2節 高溝大井地区	11
第5章 ま と め	29

挿 図 目 次

第1図 高溝遺跡位置図	1
第2図 高溝遺跡調査地区位置図	2
第3図 ニエダ地区遺構全体図	4
第4図 掘立柱建物遺構図(1)	6
第5図 掘立柱建物遺構図(2)	7
第6図 掘立柱建物遺構図(3)	8
第7図 石器実測図	11
第8図 高溝大井地区遺構全体図	12
第9図 繩文式土器実測図(前期)	14
第10図 繩文式土器実測図(中期)	15

第11図 繩文式土器実測図(後期)	16
第12図 繩文式土器実測図(晚期)	17
第13図 弥生式土器・古式土師器実測図(1)	20
第14図 弥生式土器・古式土師器実測図(2)	21
第15図 弥生式土器・古式土師器実測図(3)	22
第16図 弥生式土器・古式土師器実測図(4)	23
第17図 弥生式土器・古式土師器実測図(5)	24
第18図 弥生式土器・古式土師器実測図(6)	25
第19図 弥生式土器・古式土師器実測図(7)	26
第20図 弥生式土器・古式土師器実測図(8)	27
第21図 銅製品実測図	28
第22図 法勝寺遺跡群と額戸遺跡群	30

図 版 目 次

- 図版1 ニエダ地区調査状況
- 図版2 ニエダ地区調査状況
- 図版3 ニエダ地区調査状況
- 図版4 高溝大井地区調査状況
- 図版5 高溝大井地区調査状況
- 図版6 出土遺物 繩文式土器（前期）
- 図版7 出土遺物 繩文式土器（前期）
- 図版8 出土遺物 繩文式土器（中期）
- 図版9 出土遺物 繩文式土器（中期）
- 図版10 出土遺物 繩文式土器（後期）
- 図版11 出土遺物 繩文式土器（後期）
- 図版12 出土遺物 繩文式土器（後期）
- 図版13 出土遺物 繩文式土器
- 図版14 出土遺物 繩文式土器
- 図版15 出土遺物 繩文式土器

- 図版16 出土遺物 繩文式土器
- 図版17 出土遺物 繩文式土器
- 図版18 出土遺物 石器・繩文式土器
- 図版19 出土遺物 弥生式土器・古式土師器
- 図版20 出土遺物 弥生式土器・古式土師器
- 図版21 出土遺物 弥生式土器・古式土師器
- 図版22 出土遺物 弥生式土器・古式土師器
- 図版23 出土遺物 弥生式土器・古式土師器
- 図版24 出土遺物 弥生式土器・古式土師器

第1章 調査にいたる経過

滋賀県坂田郡近江町高溝には、周知の遺跡として集落の西側に高溝遺跡が所在している。同遺跡は縄文時代から平安時代に至る複合遺跡として周知されており、これまでにも住宅開発や工場造成工事に伴い調査が続けられてきたところである。

今般県営は場整備事業（天の川東部地区高溝額戸工区）が計画され、高溝遺跡をはじめ額戸遺跡、法勝寺遺跡等に事前の発掘調査の必要が生じた。

調査は滋賀県教育委員会の依頼により、近江町教育委員会が実施することになった。現地調査は昭和61年度から昭和63年度において、整理調査は平成元年度に実施した。

また、現地調査においては高溝遺跡と額戸遺跡を同時に扱ってきたが、報告の時点では、「ニエダ地区」、「高溝大井地区」の2地区を高溝遺跡として取扱い、その他の地区を額戸遺跡として取り扱うこととした。



第1図 高溝遺跡位置図(約5万分の1縮尺)



第2図 高溝遺跡調査地区位置図（約5千分の1縮尺）

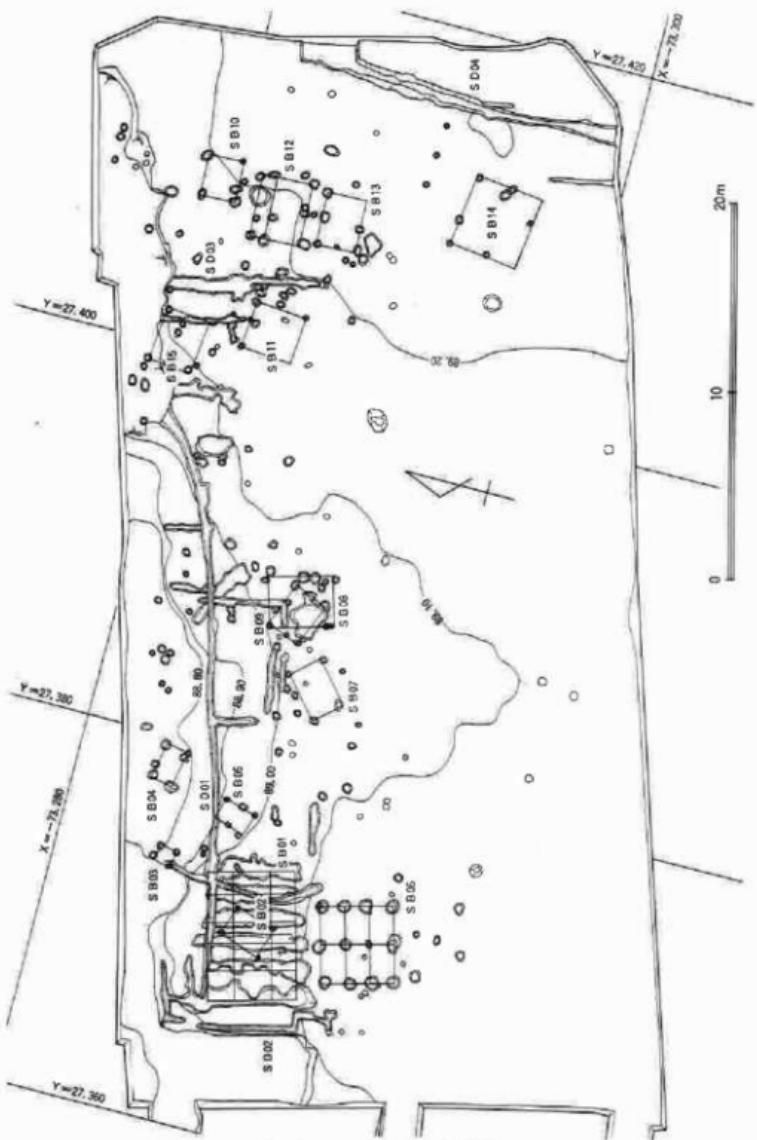
第2章 遺跡の位置と環境

高溝遺跡は、近江町内の北西部に位置し、平野部の水田地帯に拡がる。この町内北西部は、遺跡の分布密度が極めて高いところで、東の日撫山丘陵と西の琵琶湖にはさまれた平野部に2つの遺跡群が南北に並ぶ。ここでは、北側の遺跡群を「法勝寺遺跡群」と呼び、南側の遺跡群を「顔戸遺跡」と呼ぶことにする。

「法勝寺遺跡」は、現在の国道8号線バイパスと土川の交点を中心に所在し、法勝寺遺跡、狐塚遺跡、奥松戸遺跡、碇遺跡の4つの遺跡がこれに含まれる。この遺跡群は土川の形成する未発達な扇状地に立地しており、縄文時代早期に高山寺式土器をもつ遺跡が初見し、弥生時代中期から後期にかけ低墳丘墓群で構成される広大な墓域をもつ。墓域の多くは方形の低墳丘墓で占められるが、中には前方後方形をする低墳丘墓が出現するなど、弥生時代中後期の墓制を捉える良好な資料となっている。古墳時代にはいると南北に2つの小規模古墳群が出現する。そのうち南側の狐塚古墳群は帆立貝形古墳1基と円墳4基で構成され、埴輪をもつ中期の小規模古墳群を形成する。続く飛鳥・奈良時代には2時期に及ぶ寺院の造営、平安時代には南北地割をもった莊園遺構の出現など、連綿と遺跡は継続している。

もう一方の「顔戸遺跡群」は、「法勝寺遺跡群」の南側に隣接しており、条里景観の残る水田地帯に所在し、顔戸遺跡、高溝遺跡、長門寺遺跡、正光寺遺跡の4つの遺跡がこれに含まれる。この遺跡群は「法勝寺遺跡群」において空白となる縄文時代の前期から晩期にかけての遺物を多く出土することを第一の特徴とし、次いで弥生時代後期から古墳時代中期にかけて大規模な集落が営まれることを第二の特徴とする。この集落遺構が「法勝寺遺跡群」の低墳丘墓群に付帯するものにあたるか否かは、今までのところ不明であるが、この集落遺構の特徴は、遺構群の中に「環濠」と解釈される大溝遺構が存在することであり、大規模な遺跡群であることが知られる。

「顔戸遺跡群」が「法勝寺遺跡群」と最も異なるのは、前者が条里景観下に所在するのに対し、後者が別の地割景観下に所在することにある。このことは、高溝遺跡を含む「顔戸遺跡群」が9世紀前半よりの活発な条里開発を受けたことを物語っており、同遺跡群において先行した縄文時代から奈良時代に至る多くの遺構が、開発の影響により消失あるいは埋没されていることが想定されている。



第3図 ニエダ地区造構全体図

第3章 調査の経過

調査は、ほ場整備事業によって切土工事と排水路工事の計画個所を対象として、試掘調査を実施し、その結果に伴い計画変更等の協議をし、工事によって影響の残る個所を発掘調査し、資料の記録保存化を図った。

現地における調査の方法は、0.4m³級バックホーを用いた表土掘削の後、人力による遺構検出、遺構内掘削を行い、航空写真測量による遺構実測をおこなった。

第4章 調査の結果

第1節 ニエダ地区

高溝遺跡の調査地区のうち西側の調査区を「ニエダ地区」、東側の調査区を「高溝大井地区」と命名した。

ニエダ地区は南北約28m、東西約58mをはかり、約1,800m²の範囲をもつ。

遺構面はほぼ水平で、トレンチの北西にわずかに傾斜する。この調査区で確認された遺構は4条以上の溝（S D01～S D04）と14棟の掘建柱建物（S B01～S B14）である。各遺溝の詳細を以下に記す。

S D01

幅40cm、深さ20cm、長さ30mの溝で東西方向に伸びる。遺構はほぼ直線的に伸びるが、東の端で北へ屈曲し、落ちこみ遺構につながる。溝の主軸は景観条里の陌線方位に類しており、幾条かの別の溝と直交するが、層位的な重複関係は不明である。

S D02

幅35cm、深さ20cm、長さ7mの溝で掘建柱建物S B01の西側に並行する。溝は南北に伸びるが、一部東折し、さらに南折する。遺構の主軸は景観条里の方向に類する。

S D03

幅80cm、深さ15cm、長さ90cmの溝でS D02同様に主軸が景観条里の方向に類する。また、溝の北端はS D01同様に落ちこみ遺構につながる。

S D04

幅30cm～1m10cm、深さ30cm、長さ16mをはかる。遺構の主軸はほぼ南北方向を示し、他の溝と異なる。この溝は南北に伸びた後、北端で東折し、幅約3mと広くなる。溝の基底部は北側が低く、南側が高くなっている。

S B01

梁行3間（4m70cm）・桁行5間（6m80cm）をはかる布掘の掘立柱建物。S D01に先行するが、S D02とは共存するものと考えられる。景観条里方向に規制を受けた東西棟建物である。

S B02

梁行1間（1m50cm）・桁行1間（2m40cm）をはかる掘立柱建物。S B01に先行する遺構で、主軸方位N19°Eをはかる。

S B03

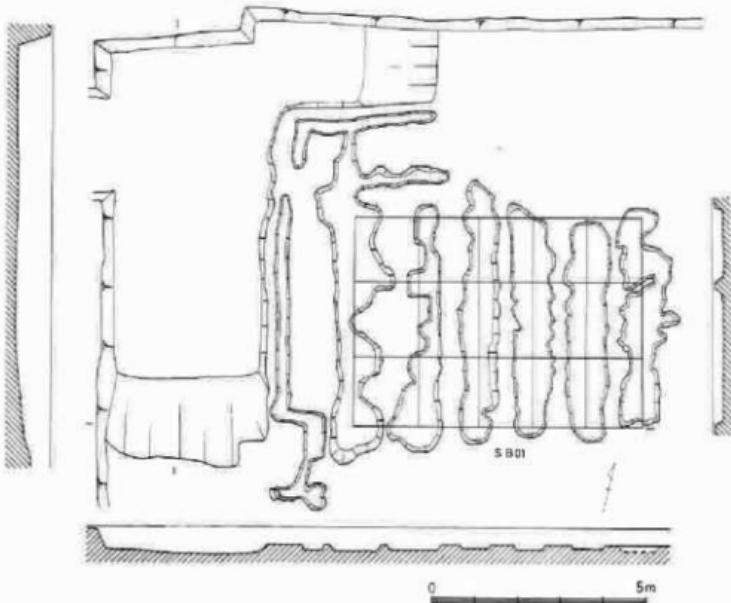
梁行1間（90cm）・桁行1間（1m）をはかる規模の小さな掘立柱建物。主軸方位N12°Eをはかる。

S B04

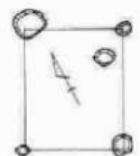
梁行1間（1m20cm）・桁行1間（2m）をはかる東西に長い掘立柱建物。主軸方位N11°Eをはかる。

S B05

梁行1間（1m20cm）・桁行2間（1m70cm）をはかる南北棟の掘立柱建物。主軸方位N



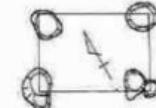
第4図 掘立柱建物遺構図(1)



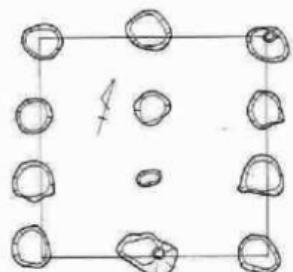
SB02



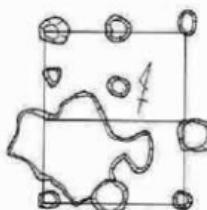
SB03



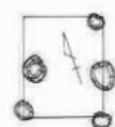
SB04



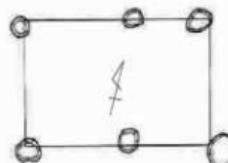
SB05



SB06



SB05



SB07

第5図 据立柱建物造構区(2)

17°E をはかる。

S B 06

梁行 2 間 (4m10cm)・桁行 3 間 (3m90cm) をはかる南北棟の総柱の掘立柱建物。S B 01 の南側に位置し、並行するため、建物主軸が景観条里の方向に揃う。梁行の柱間の芯心は 2m05cm、桁行の柱間の芯心は 1m80cm をはかる。

S B 07

梁行 1 間 (1m85cm)・桁行 1 間 (2m75cm) をはかる掘立柱建物。遺構の主軸方位は N 49°E をはかる。

S B 08

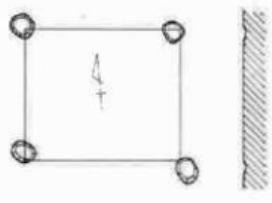
梁行 1 間 (2m70cm)・桁行 2 間 (3m40cm) をはかる南北棟の立建柱建物。S D 01 に直交しており、景観条里方位に遺構の主軸をそろえる。

S B 09

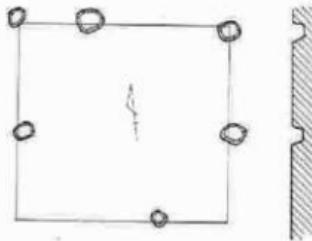
梁行 1 間 (1m90cm)・桁行 1 間 (2m50cm) をはかる東西棟の掘立柱建物。遺構の主軸方位は N24°E に直行する。

S B 10

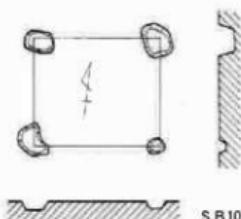
梁行 1 間 (1m90cm)・桁行 2 間 (2m20cm) をはかる東西棟の掘立柱建物。遺構の主軸方位はほぼ正南北方位に直交する。



S B 15



S B 14



S B 10



第 6 図 掘立柱建物遺構図(3)

S B11

梁行2間（2m55cm）・桁行2間（2m75cm）をはかる南北棟の掘立柱建物。S B09の南側に位置する。遺構の主軸方位はN 9°Eをはかる。

S B12

梁行1間（1m90cm）・桁行2間（3m30cm）をはかる東西棟の掘立柱建物。S B10とS B13のあいだに位置しており、北側に庭を伴う。S B10同様に主軸方位がほぼ正南北方位に直交する。

S B13

梁行1間（2m10cm）・桁行2間（2m80cm）をはかる東西棟の掘立柱建物。S B12の南側に位置する。S B12同様に建物主軸方位がほぼ正南北方位に直交する。

S B14

梁行2間（3m70cm）・桁行3間（3m90cm）をはかる東西棟の掘立柱建物。S B13の南側に位置するが、建物主軸方位は異なり、N 6°Eに直交する。

S B15

梁行1間（2m30cm）・桁行1間（2m90cm）をはかる東西棟の掘立柱建物。S B10の北側に位置し、主軸をほぼ正南北方位に向ける。

以上の遺構をまとめると、掘立柱建物がその主軸方向から3群に大別されることが明らかである。

第1のグループは、調査区の西半部を中心に分布する主軸の東傾する建物で、これにはS B02、S B03、S B04、S B05、S B07、S B08、S B09が含まれる。遺構の多くは小形の平面形をしており、なかでもS B03、S B04、S B05の3棟は高床式倉庫になる可能性がある。第2のグループは、調査区の東半部を中心に分布する主軸が正南北方位に揃う建物である。これにはS B10、S B11、S B12、S B13、S B14、S B15が含まれ、また東端の溝S D04がこれに該当する。遺構は正方位を意識して構築されているが、主軸方位の傾きには若干の差があり、S B11、S B14、S B15の主軸方位と、S B10、S B12、S B13の主軸方位の傾きには、それが認められ、構築時期に若干の時間差が存在するのかもしれない。第3グループは、調査区の西半部を中心に分布する主軸の西傾する建物でこれにはS B01、S B06、S B08が含まれ、また溝S D01、S D02、S D03がこれにあたる。この遺構群は景観条里の規制を受けており、この地域における坂田郡統一条里の開発期の遺構と考えられる。

このニエダ地区においては、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器等の

出土遺物があるものの、いずれも固化不能な細片であり、遺構の年代をあきらかにすることはできない。しかしながら、検出した3群の遺構については、その傾向が小形のものから次第に正方位を意識したるものへと移り、さらには条里に規制されたものへと移行しており、第1のグループから第2のグループ、さらには第3のグループへと変遷することがあきらかである。

そこで各グループの遺構の年代を周辺の調査区の内容を考慮にいれてみると、隣接の「高溝大井地区」では大溝遺構の土層堆積中に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて遺物が多数含まれており、近接地に同時期の遺構の存在が示唆されるため、一応この時期が第1グループの時期と考えている。次に正南北方位に主軸をもつ第2グループの時期については、周辺調査区の傾向からは8世紀代のものと考えられるが、8世紀のものとする明確な根拠は無い。

最後に第3グループは近年の調査から付近の条里普及年代を9世紀に認める資料が増加しており、9世紀およびそれ以降の年代が与えられよう。

第2節 高溝大井地区

高溝大井地区は南北約30m、東西約90mをはかり、約2,700m²の範囲をもつ。調査区の中央には幅10~18mの大溝状の落ちこみ遺構があり、その東西で遺構面の標高が異なり、東側が西側に比べかなり高くなっている。

調査区のなかで、西側には景観条里方位に直交する溝が確認されたが、その他には主だった遺構が無く、東側で検出した柱穴群からも据立柱建物を構成するものは確認されなかった。

しかしながら、中央の大溝からは多量の遺物が出土しており、隣接するニエダ地区と様相を異にしている。

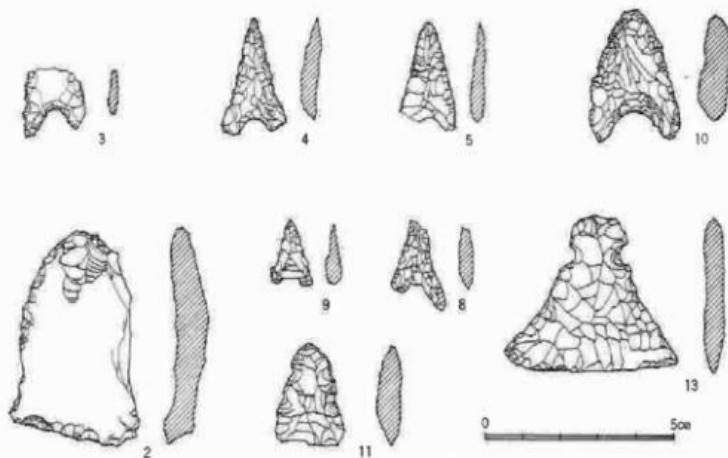
大溝から出土した遺物は、石器、縄文式土器、弥生式土器、古式土師器等であり、以下にその説明を加える。

石 器

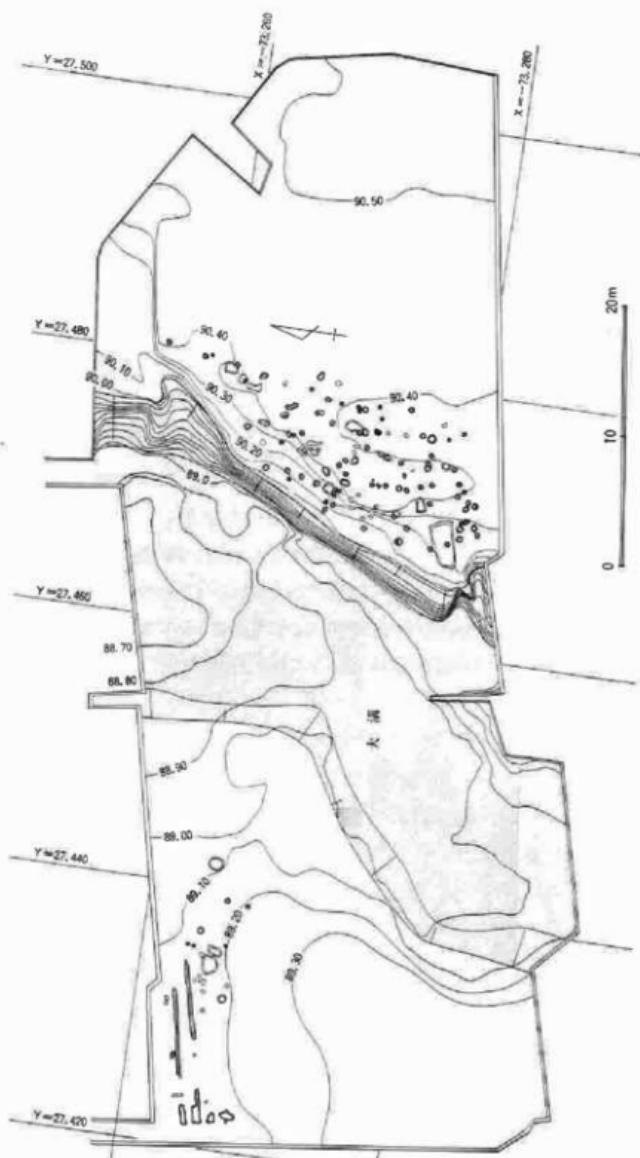
大溝の埋土中から多数の縄文式土器とともに石器が出土した。

石器には有舌先頭器、石鉄、石匙、叩き石等がある。(2)は有舌先頭器で下半部を欠損する(1・3~11)は石鉄、(12~14)は石匙であるが、いずれも多形式の縄文式土器と共に伴しておらず、個々の遺物の具体的な年代を明らかにすることはできない。

また、未製品の剝片が多数出土している。



第7図 石器実測図



第8図 高溝大井地区遺構全体図

縄文式土器

高瀬大井地区の大溝から縄文時代前期、中期、後期、晩期の土器が出土している。

前期の遺物（1～20・91～97）は、その大半が「北白川下層式」に相当する土器で（1・9・18他）、深鉢の口縁部および体部である。（4・10・13・20）には爪形文の施文が認められ、（3）には円形の透しが施される。（2）は円形の刺突文を施し、「諸磯B式」に相当する。

中期の遺物（21～39・98～105）は、一部に前葉の土器が含まれるが、大半は後葉の土器である。（30）は太い沈線文を施す「北白川下層式」の新しい時期に該当する。（23・24・25・31・32・33・34・100・102・103）は「船元III式」に相当する。中期の土器の多くは「船元式」に相当するが、これは坂田郡内の縄文中期の出土遺物の傾向に合致している。

後期の遺物（40～58・106～111・113～127）は、初頭の中津式に始まり、縁帶文系土器に統く。

（40・44・58・109・115）は「中津式」に相当する。（40）は注口土器、（40・58・109・115）は二条の沈線で区画される磨消縄文をもつ。（46・54・123）は斜め方向と横方向の二条の沈線で区画される磨消縄文をもつ「堀之内II式」に相当する。（46）は口縁部の上端に付く突起。（46）は三条一対の沈線で施文され、（122・125）は多条の沈線で区画された磨消縄文である。「福田K式」以降のものであろう。

晩期の遺物（59～90・112）は、後葉から末葉の突帯文系土器である。（59～68）は口縁部の上端からやや下がった位置に突帯がめぐる「滋賀黒IV式」に相当する。（59・60）は口縁部の上端部が水平になる。（78・80・81・112）は口縁部の上端に突帯がめぐり、所謂「長原式」に相当する。（80）は耳检。（85～90）は二枚貝の条痕が残る東海地方の条痕文系土器である。（85・86・87）は口縁部の上端面に刺突文がめぐる「五貫森式」、（88・89・90）は突帯の上から二枚貝の押圧が残る「馬見塚式」に該当する。

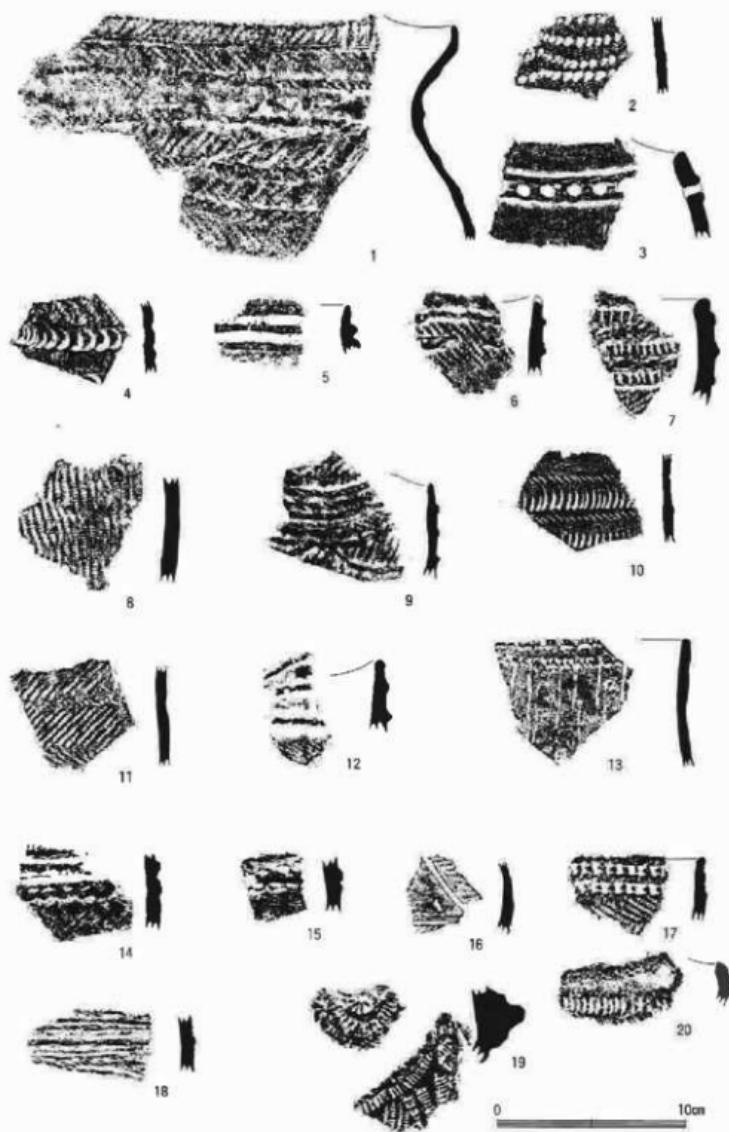
（128～202）は形式不明の遺物。前期から晩期にいたる各時期の遺物が混在する。（137）は中央に円形の穴をもつ。

（202～213）は深鉢および浅鉢の底部である。一部には網代編みの压痕を残すものが認められる。

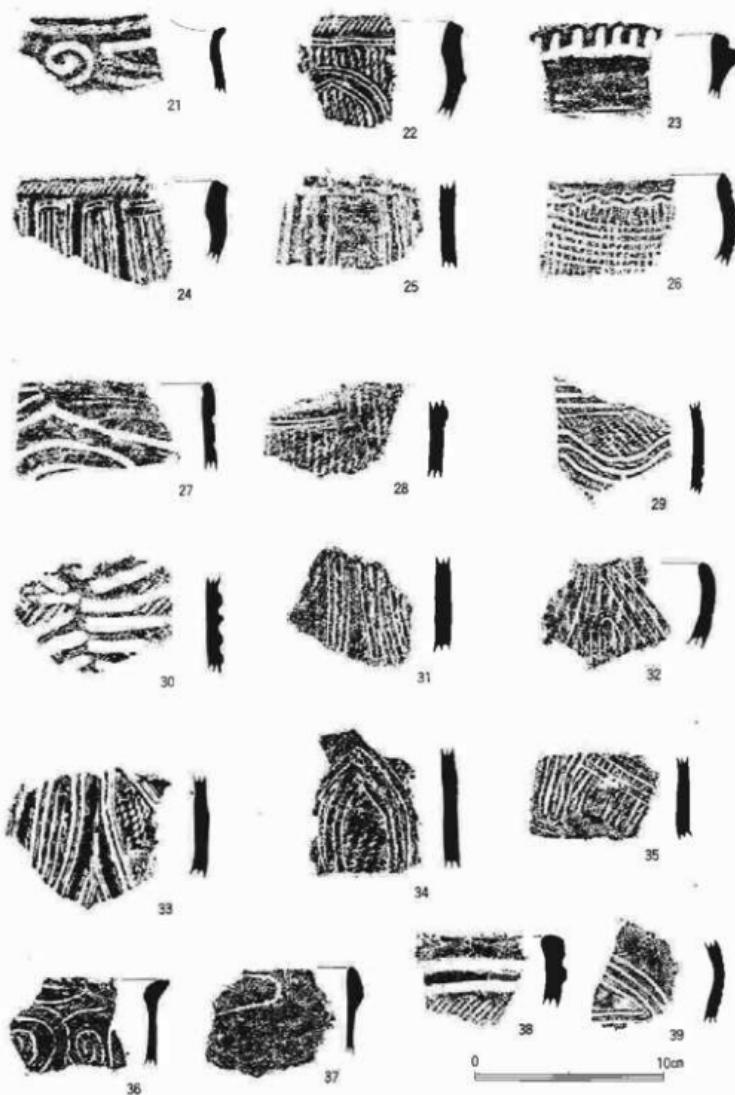
これらの縄文式土器は、時期別や形式別のまとまりが出土状態に認められず、周辺より二次的に運ばれた堆積を示している。

弥生式土器・古代土師器

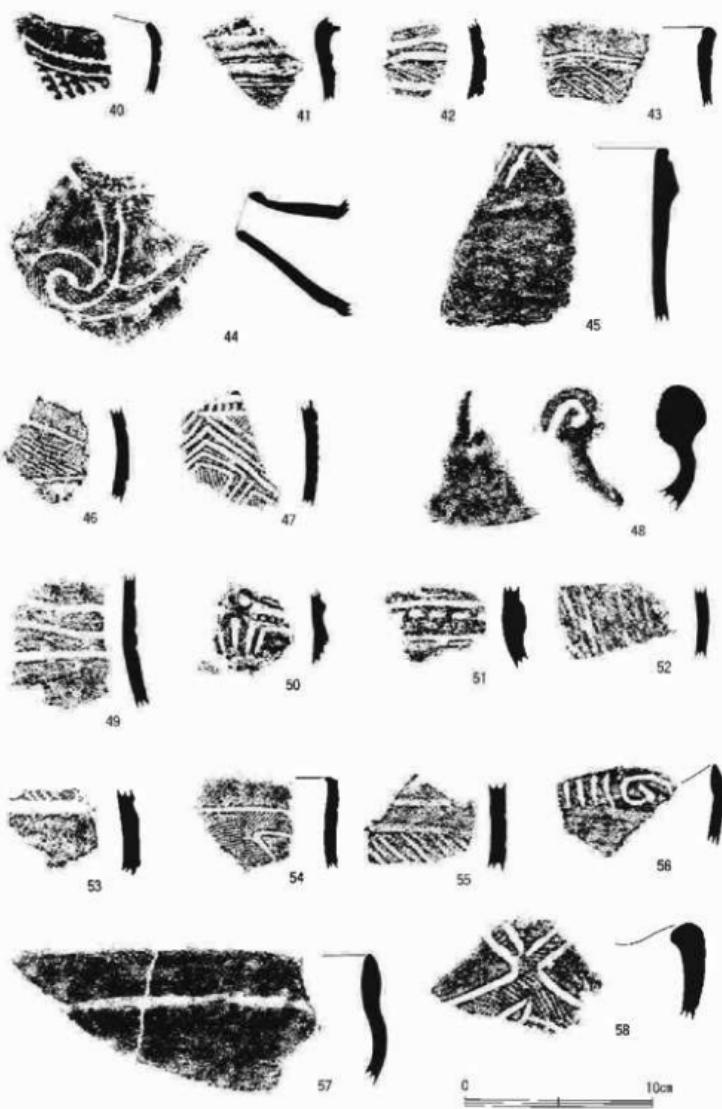
壺



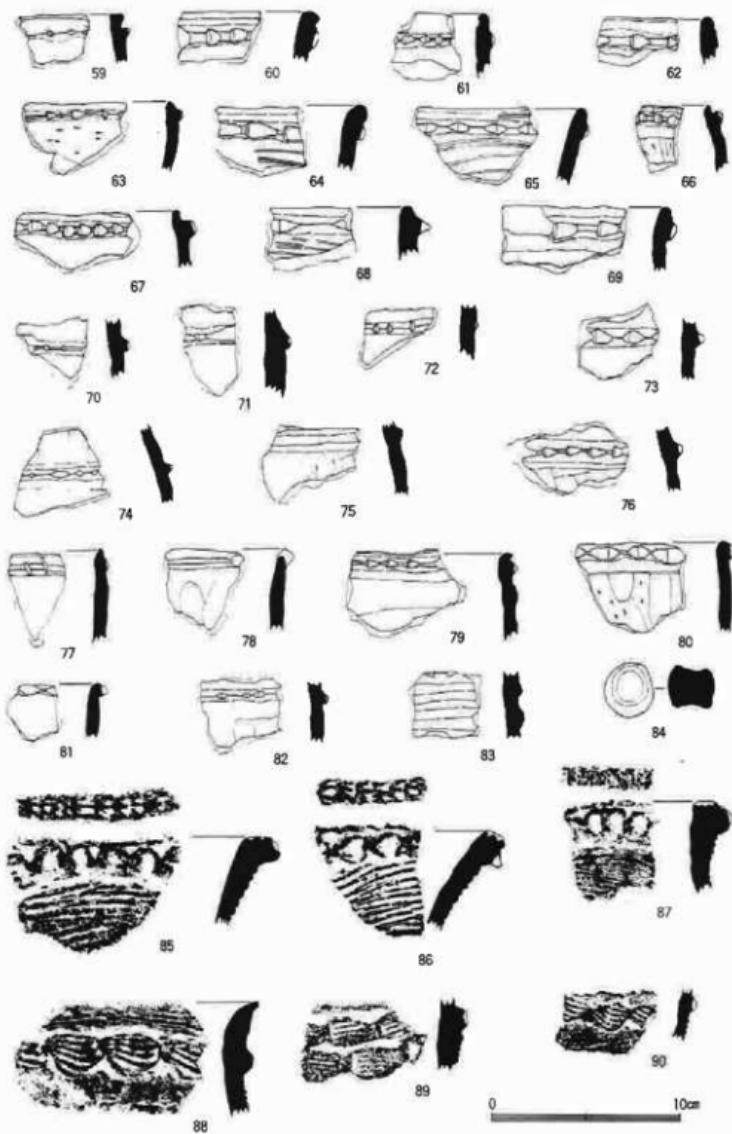
第9図 繩文式土器実測図（前期）



第10図 縄文式土器実測図（中期）



第11図 縄文式土器実測図（後期）



第12図 繩文式土器実測図（晩期）

壺A・壺B・壺C・壺D・壺E・壺F・壺G・壺H・壺I・壺Jがある。

壺A（1～23・222～225）は外反する口縁をもつもので、口縁部の先端を肥厚させないものの（7、8、9、10、11、15）ものよりも肥厚させるものが多く、その外面に沈線をめぐらせるもの（1、5、13）、擬凹線をめぐらせるもの（16、18、20、21、22）、刺突文をもつもの（8、12）、波状文をもつもの（4）、棒状浮文をもつもの（4、6、17）、円形浮文をもつもの（13）がある。

壺B（24～37、39～41）は直線的に伸びる口縁部が中程で外折するタイプのもので口縁部の多くは上下に肥厚する。口縁部の外面には、無文のもの（25、26、27、28）と沈線をもつもの（24、29、31、32、33、34）がある。また、屈折する口縁部の内面に刺突文をもつもの（24、29、30、31、32、33、34）や頭部に突帯をもつもの（24、31、35、40、41）がある。

壺C（38、42～50）は二重口縁をもつものである。このうち（42）は大形品であり、その他は小形品である。外部の施文は無文の物が多いが、刺突文をもつもの（49や波状文をもつもの（50）がある。

壺D（51～52、60～62）は内弯気味にたちあがる口縁部をもつものである。（50）は口縁部の上端に擬凹線をめぐらせる。（60）は外面に観磨きを施し、（61）は脚台を伴う。

壺E（53～54、56～58、63）は受口状の口縁をもつものである。（56）は外面に刺突文をめぐらせる。

壺F（66、67）は球形の体部をもつ壺で、中ほどが屈曲した口縁部を伴う。

壺G（68、69）は斜め上方に直線的に伸びる口縁部をもつ。

壺H（71）は直口壺で直線的に上方に伸びる口縁部の上端を丸く終えている。

壺I（94～99）は小形の丸底壺であるが、外部を観磨きしたものは無い。

壺J（92、93、221）はミニチュア製品。

この他に注目できる遺物には台付の壺（65）がある。この壺は外面に櫛描の直線文と波状文を施す。

甕

甕A・甕B・甕C・甕D・甕F・甕P・甕Gがある。

甕A（100、107、108）は外反する口縁部をもつものである。器壁の薄いものから、厚いものまで存在する。

甕B（101～104、106、107）はくの字に屈折する口縁部をもつもので、器壁の薄いものに多い。

甕C (105) は口縁部最上端が内面に肥厚する「布留式甕」である。

甕D (109~120、127~134) は受口状口縁をもつ甕である。口縁部の外面には、無文のもの (109、116~121、127、131)、刺突文をめぐらせるもの (110~114、132、134)、沈線までめぐらせるもの (115) がある。

甕E (122、123) はS字状口縁をもつもの。

甕F (124、125) は屈曲する口縁部が上部で直線的に斜め上方に伸びるもので、(124)は外面が無文であるのに対し、(125)は擬凹線をめぐらせる。

甕G (135) は屈曲した後、上方に伸びる口縁部をもつ。

(135~145、210、215~219) は脚台である。

高杯

高杯A、高杯B、高杯C、高杯Dがある。

高杯A (147、148) は口縁部と受部の境界が不明瞭なもの。

高杯B (149、231) は口縁部と受部の境界が明瞭なもの。

高杯C (150、151) は口径に対し脚の底径がはるかに大きいもの。

高杯D (159) は内弯する杯部をもつもの。

器台

器台 (160~164、205、213、227) には受け部が直線的に伸びるもの (160~164、205、213) と、鼓形の器台 (227) がある。

鉢

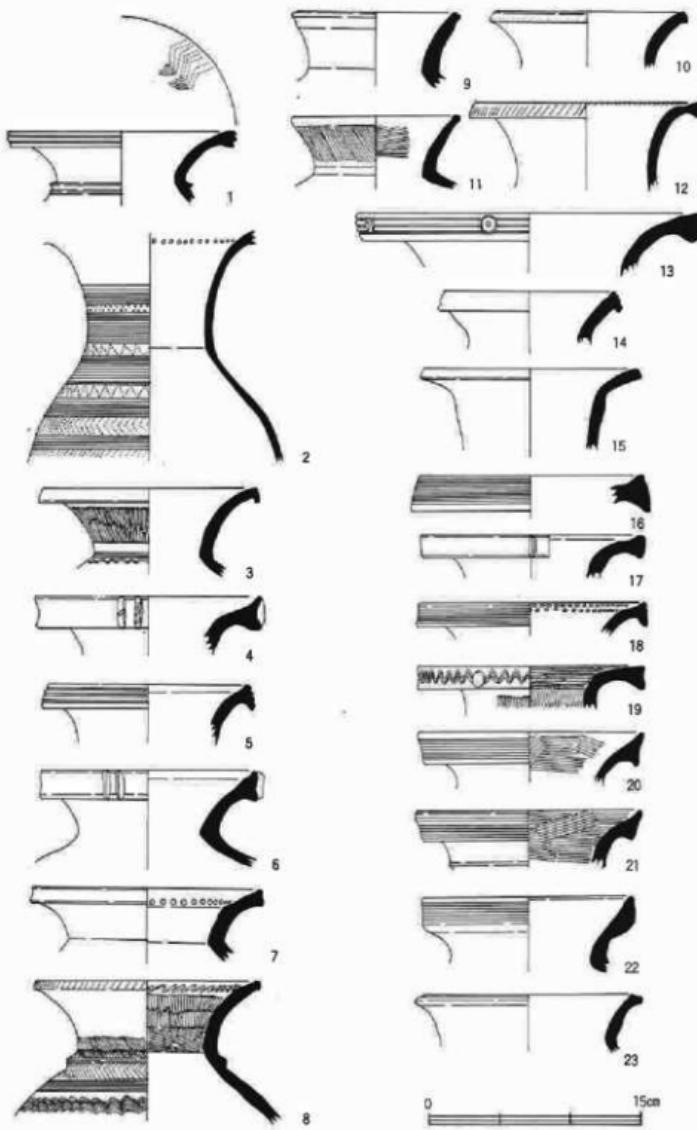
鉢 (165、1166) は扁平な体部に受口状口縁がともなうもの。

以上の遺物は高溝大井地区の大溝造構内から出土したものである。遺物は縄文時代から古墳時代までのものが混入した状態で出土しており、遺跡の存続年代が長期間におよんだことが考えられる。

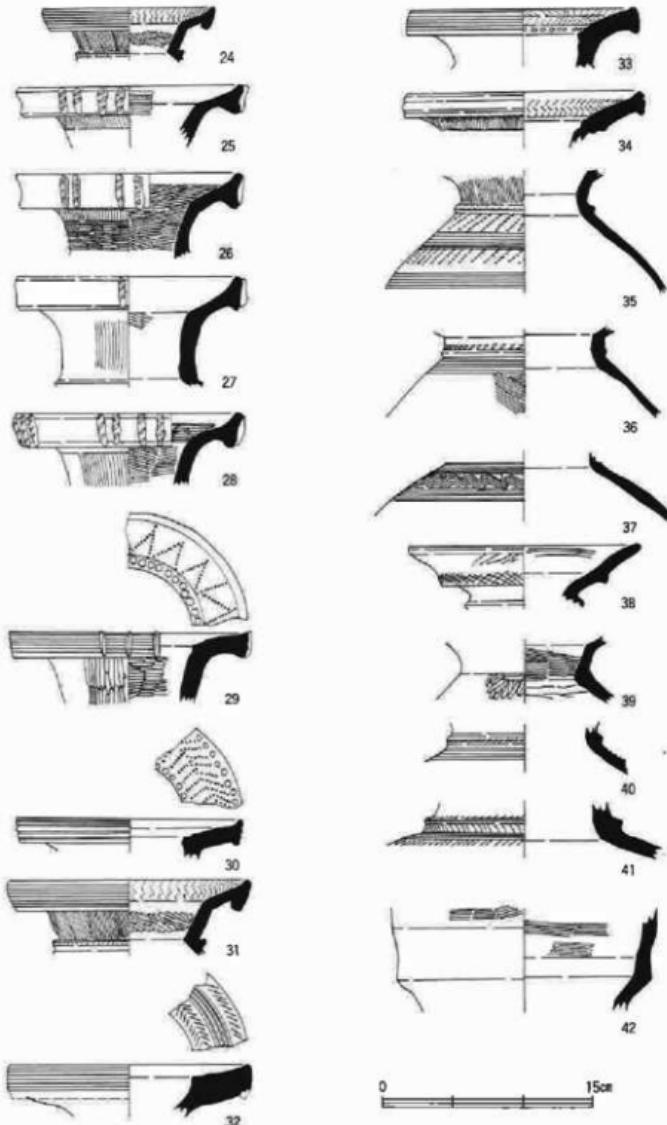
高溝大井地区の大溝より、古式土師器とともに銅製品の銅鏡(1)と鏡(2・3)が出土した。

銅鏡(1)は上半部を欠損しており、残存長2.8cm・幅8mm・厚さ3mmを測る。

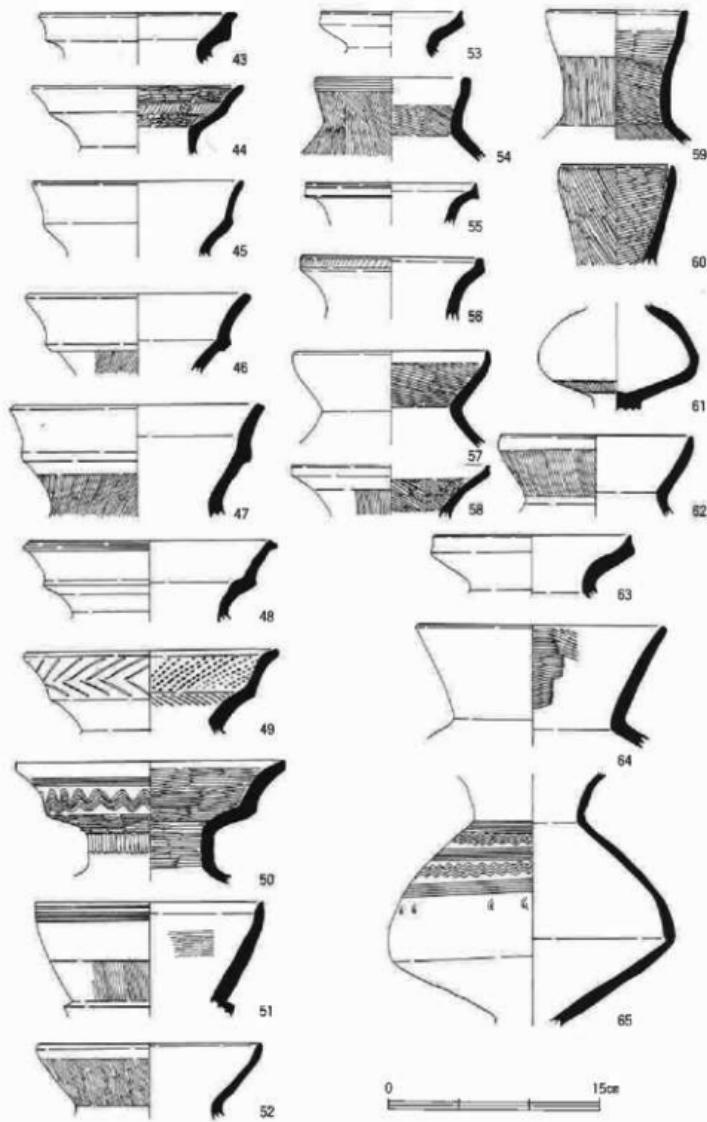
鏡(2・3)は小型彷彿鏡で、(2)は重圓文鏡と考えられ、直径2.4~3.8mm・厚さ2mmを測り、二重の圓線をもつ。また外側の圓線上に直径約2mmの円孔を穿つ。(3)は素文鏡と考えられ、直径3.4~3.8cm・厚さ2mmを測る。



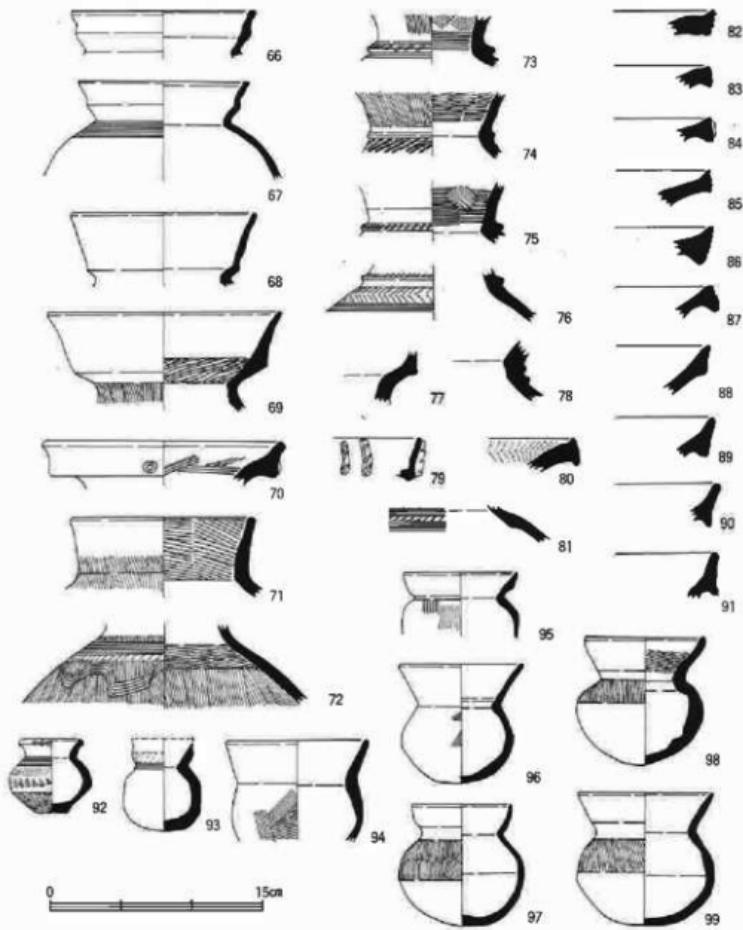
第13図 弥生式土器・古式土器実測図(1)



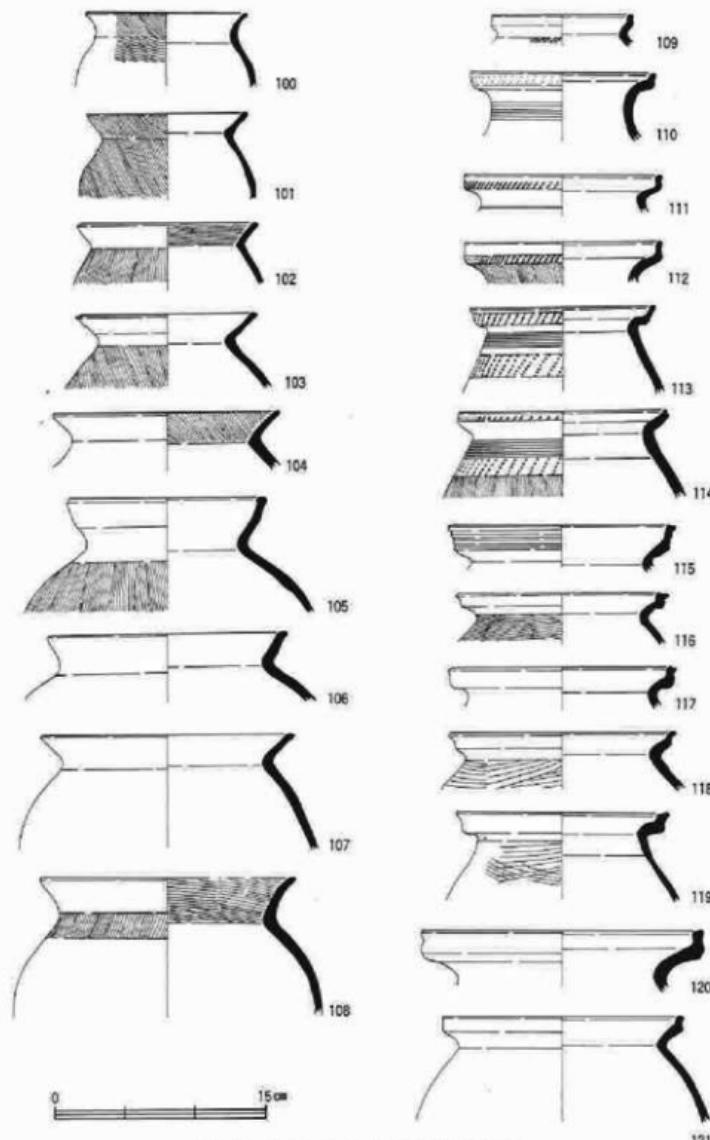
第14図 弥生式土器・古式土器実測図(2)



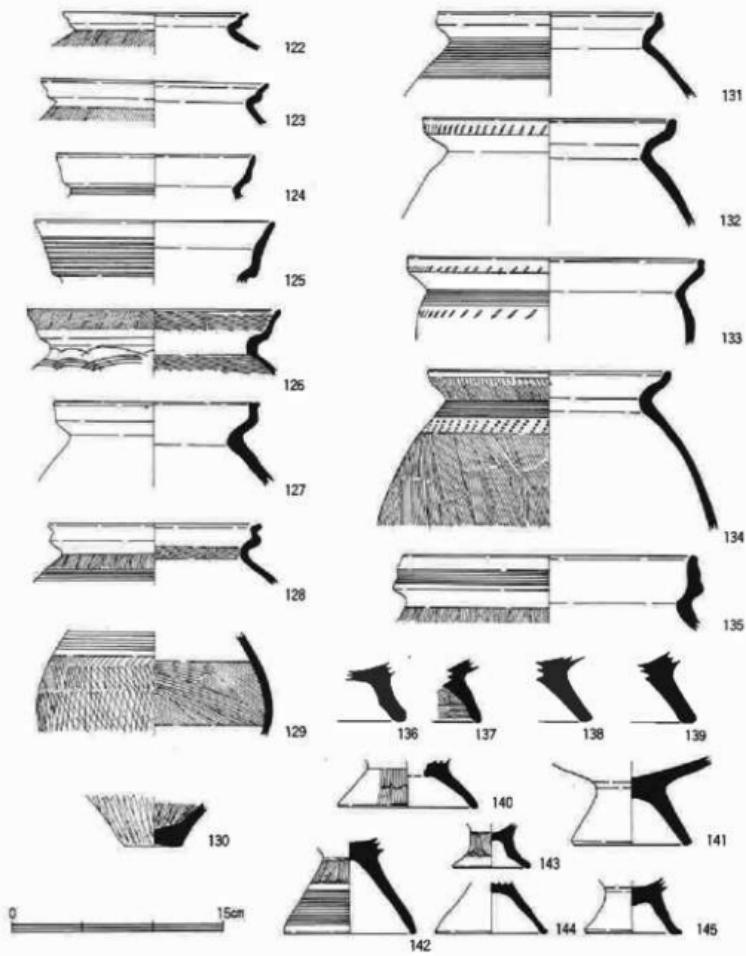
第15図 弥生式土器・古式土師器実測図(3)



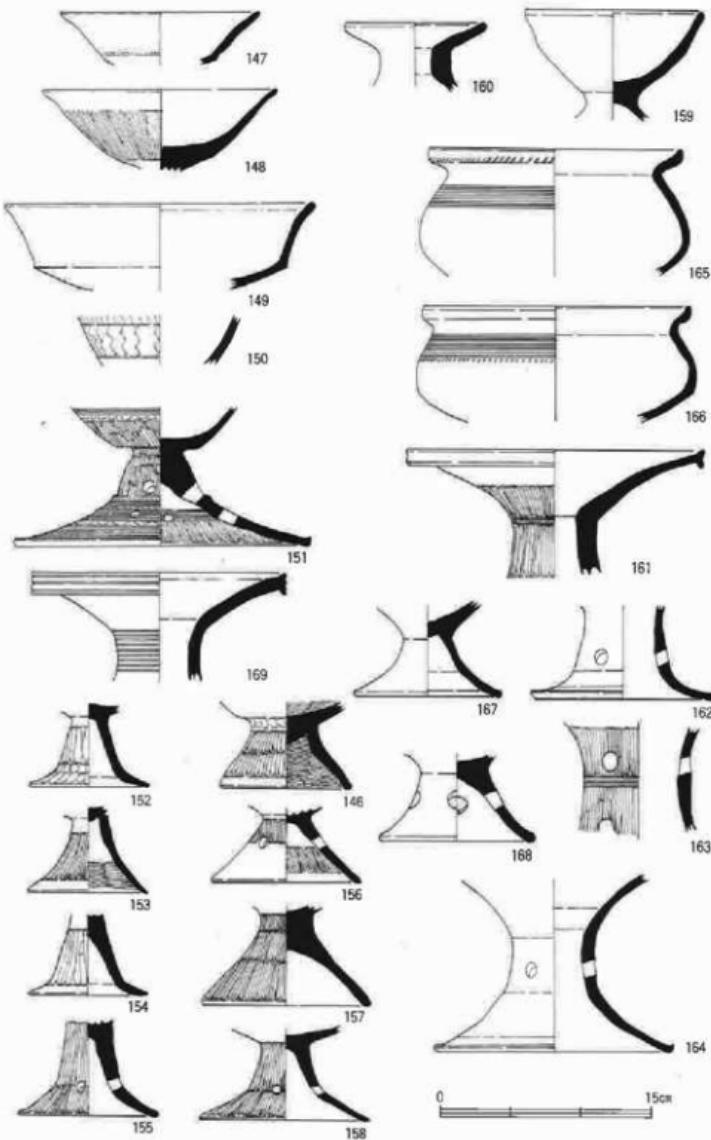
第16図 生式土器・古式土器実測図(4)



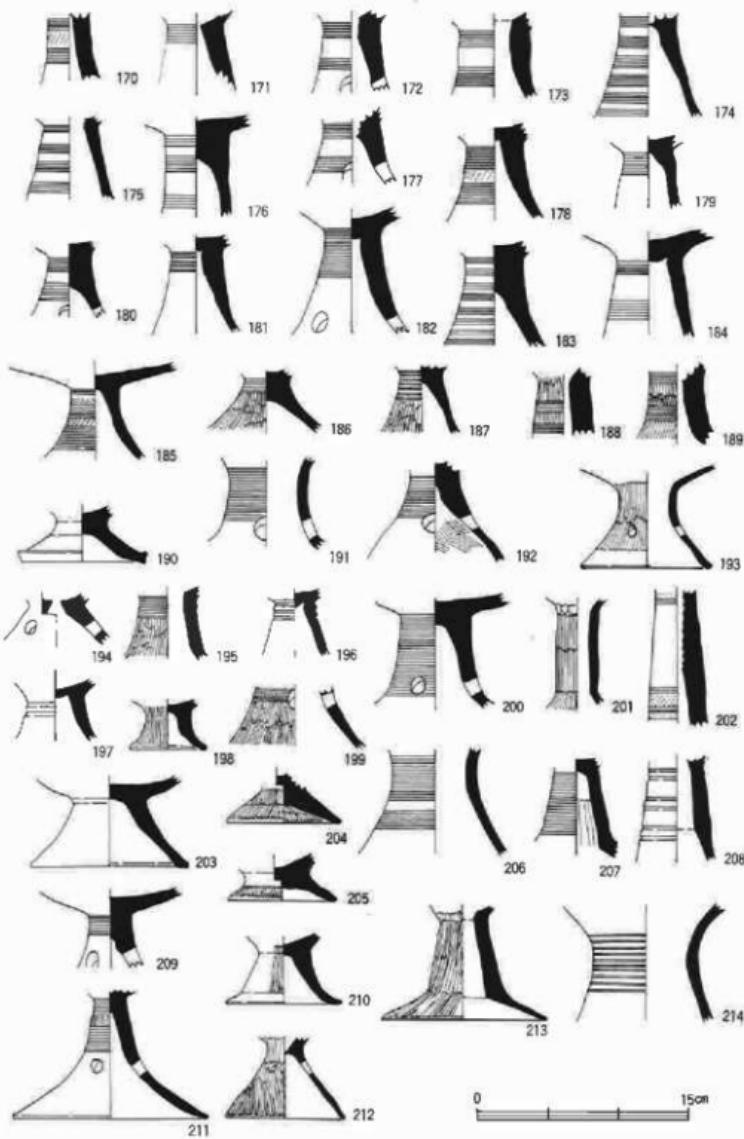
第17図 弥生式土器・古式土師器実測図(5)



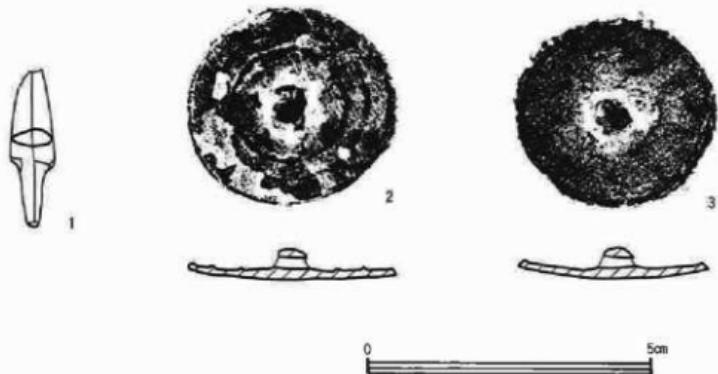
第18図 弥生式土器・古式土師器実測図(6)



第19図 弥生式土器・古式土師器(7)



第20図 弥生式土器・古式土師器実測図(8)



第21図 銅製品実測図

第5章 まとめ

「ニエダ地区」と「高溝大井地区」の調査結果から、高溝遺跡の概略をまとめてみたい。高溝遺跡の両地区は広義の「顔戸遺跡群」に含まれており、現地調査のおりにも「顔戸遺跡」として取り扱われたり、「高溝遺跡」として取り扱われたりしており、混乱を招いてきたが、ここでは「高溝遺跡」として取り扱った。これは「顔戸遺跡群」が景観条里の普及した水田地帯に拡がること、さらに、そこに含まれる「高溝遺跡」が縄文時代前期から晩期に至る時期をその存続時年代の第一の特徴とすることによっている。

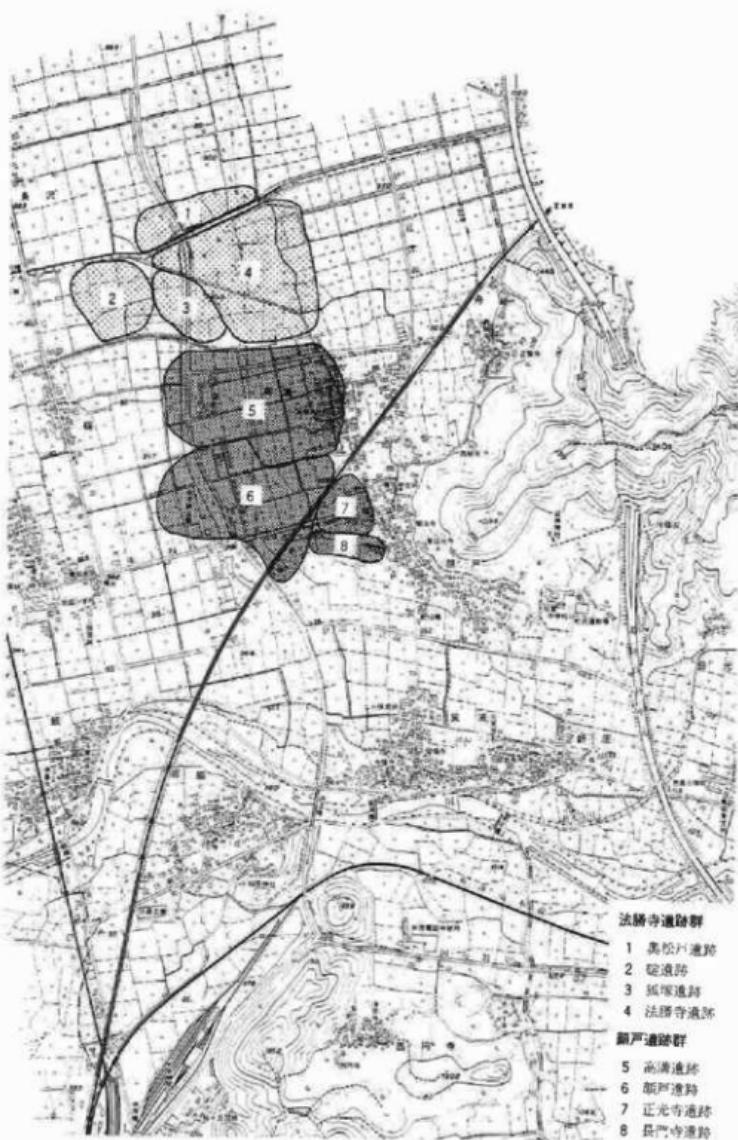
高溝遺跡では縄文時代前期に生活の初見が認められるが、これは北方の法勝寺遺跡群の早期の遺跡に継続するものと考えられ、以降法勝寺遺跡群では縄文期の遺跡は姿を消してしまった。変わって、高溝遺跡において前期から晩期に及ぶ遺跡が出現する。高溝遺跡では明確な縄文時代の遺構は確認されていないが、高溝大井地区の大溝に運ばれた遺物から付近にその存在が示唆される。遺物の傾向は各時期におよんでおり、前期の「北白川下層式」・中期の「船元式」・後期の「中津式」・「堀之内II式」・晩期の「滋賀里IV式」・「船橋式」・「長原式」・「五貫森式」・「馬見塚式」の各時期に画期をもつことが明らかとなった。このことから高溝遺跡においては、かなりの長期間にわたって集落が形成されたことが理解される。この集落は、琵琶湖まで現在の距離にして約3km、標高差にして約5mに立地するだけでなく、東方には日撫山丘陵がひかえており、蛋白源の供給に適した位置に所在することが明らかである。

続く弥生時代に入ると、前期から中期に至る遺構や遺物は確認されていないが、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての画期が認められる。

この時期の建物は、高溝大井地区の大溝より多数出土した。これらの遺物は器種・調整とともに近江特有なものが多いが、一方で東海地方の影響を多く受けた土器が含まれる。高杯には「山中式」、壺には「欠山式」の特徴が認められる他、甕には近江の受口状口縁甕を中心としながらも、東海のS字状口縁甕、北陸の擬凹線甕が混在しており、融合する地方文化の一形態をしめしている。

この弥生時代後期から古墳時代中期にいたる時期の遺構としては、「ニエダ地区」の第1グループの建物群が想定される。遺構は未完成な平面形の小規模建物であり、その一部には高床式倉庫等が含まれたものと考えられる。

古墳時代の遺構を考える上で「大溝」の存在が重要視される。この大溝は顔戸遺跡群の中を走り抜けており、上流の顔戸遺跡から下流の高溝遺跡へと通じている。高溝遺跡で検



第22図 法勝寺遺跡群と厨戸遺跡群

出した大溝の内部には、縄文時代から古墳時代を中心とした遺物が多く出土しているが、中でも古式土師器とともに出土した「小形彷製鏡」とミニチュア土器の存在は、大溝周辺において祭祀行為がおこなわれた可能性を示している。

古墳時代後期以降になると遺跡の存在が不明瞭になるが、奈良時代になると、北方の法勝寺遺跡群で寺院の建立が開始され、高溝遺跡においても正南北方位を意識した建物の建設が開始される。これは高溝遺跡の「ニエダ地区」第2グループの建物遺構が該当しており、区画する南北方向の溝と、それに並行する掘立柱建物群が出現する。

平成元年度に周辺で実施された高溝遺跡の発掘調査からは、9世紀半に活発な条里開発が確認されており、小規模の溝や沼沢地の埋設が各地で確認されている。高溝遺跡では「ニエダ地区」第3グループの建物が、この時期もしくは、それ以降に想築されたと想定され、平安時代前期から中期にかけて、条里景観に規制された建物群の出現が認められる。

このように高溝遺跡では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代における多時期の遺構が複合して存在するが、これらは平安時代前期以降の条里開発によって大きく景観を変化させており、先行する時代の遺跡が整地されたり、削平されて遺構の基底部だけを残す「ニエダ地区」や、整地埋設された大溝を残す「高溝大井地区」を生み出したと理解される。これは高溝遺跡が、条里景観下に位置することと合致しており、高溝遺跡の本来の様相が、平安時代の条里開発によって複雑化していることが理解される。

以上、高溝遺跡の性格は、第一に縄文時代に連綿と続く集落であったこと、第二に弥生時代後期から古墳時代中期に及ぶ大溝を備えた集落であったこと、第三に寺院（法勝寺遺跡）の造営時に南北方位の主軸建物をもち、再出現した集落であったこと、第四に平安時代前期以降の条里開発期に、水田管理の建物群を構成したことが明らかとなった。

今回の調査は、近江の湖北地域において、集落遺跡の変遷を捉える好例となったが、この報告では遺構・遺物ともに詳細な分析を加えることができなかった。ご容赦願いたい。

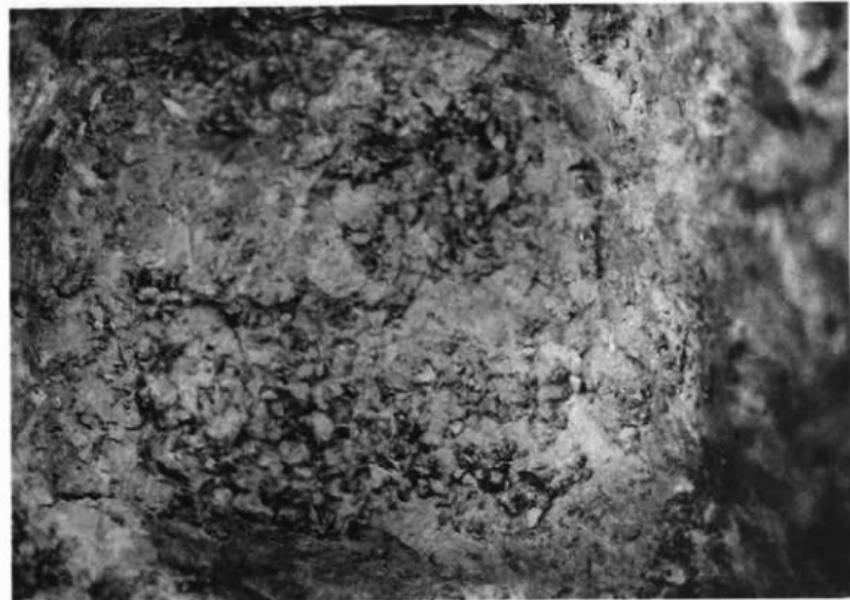
図 版



ニエダ地区調査状況



ニエタ地区調査状況



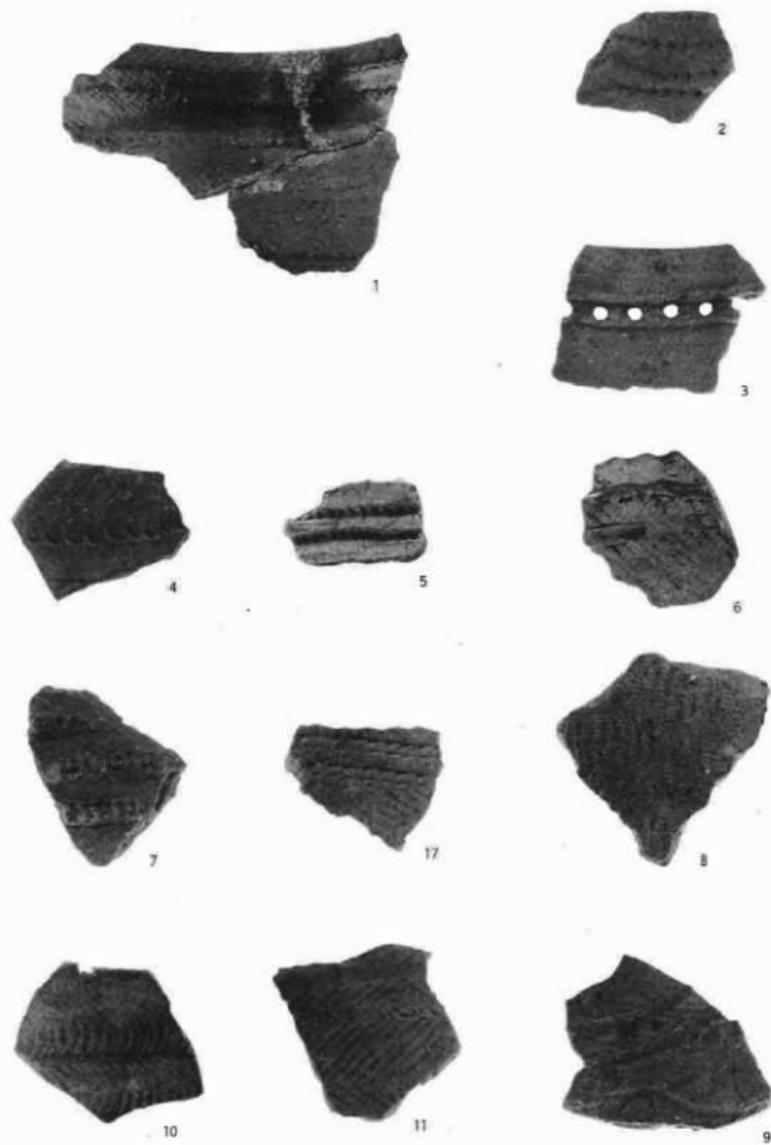
ニエダ地区調査状況



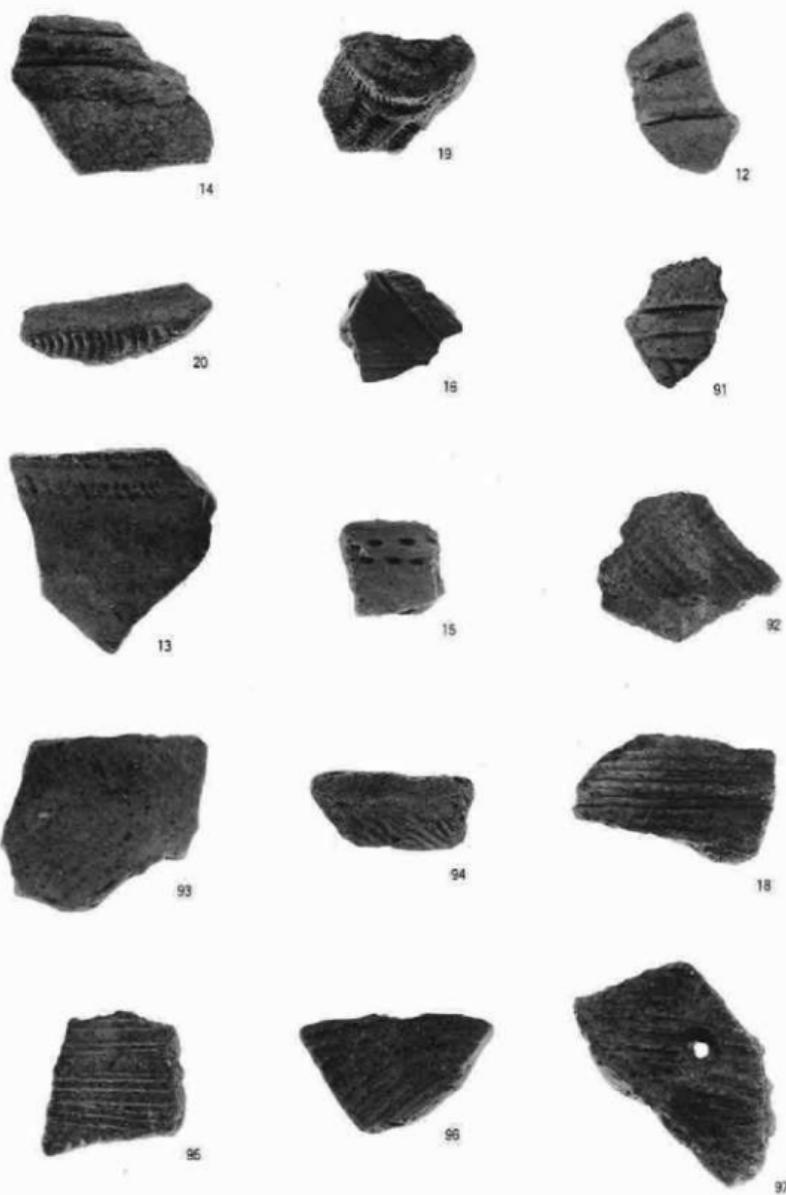
高溝大井地区調查状况



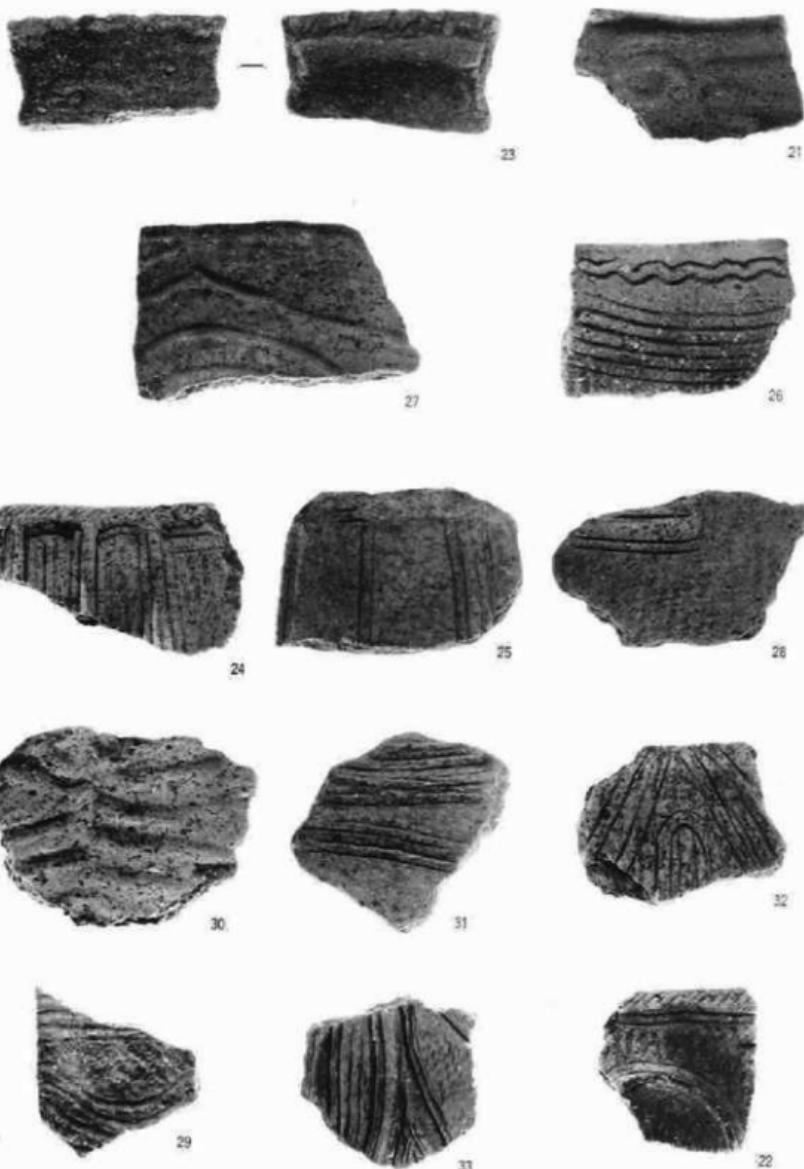
高溝大井地區調查狀況



出土遺物 繩文式土器（前期）



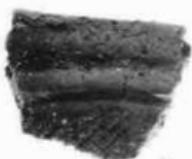
出土遺物 繩文式土器（前期）



出土遺物 繩文式土器（中期）



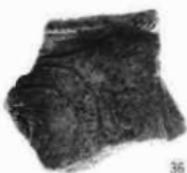
96



98



99



96



100



101



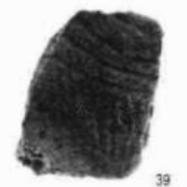
102



103



104



105



104



106



105

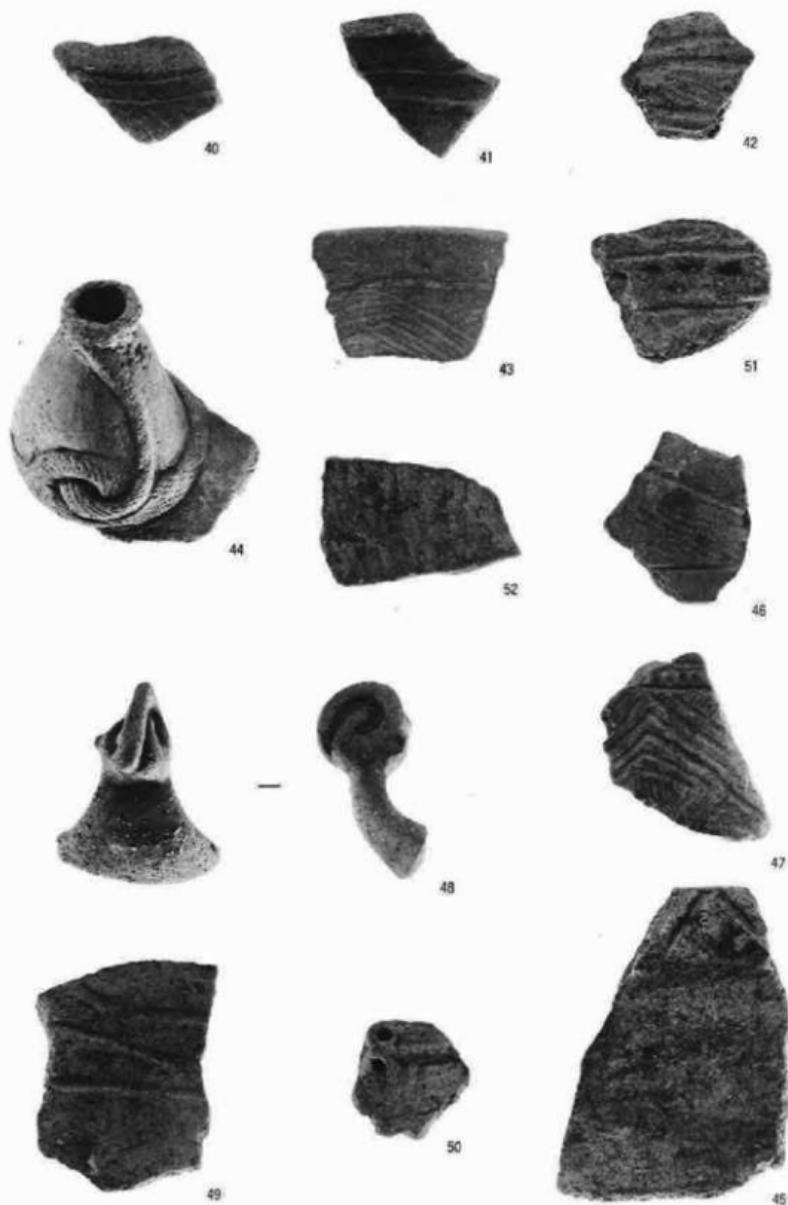


—

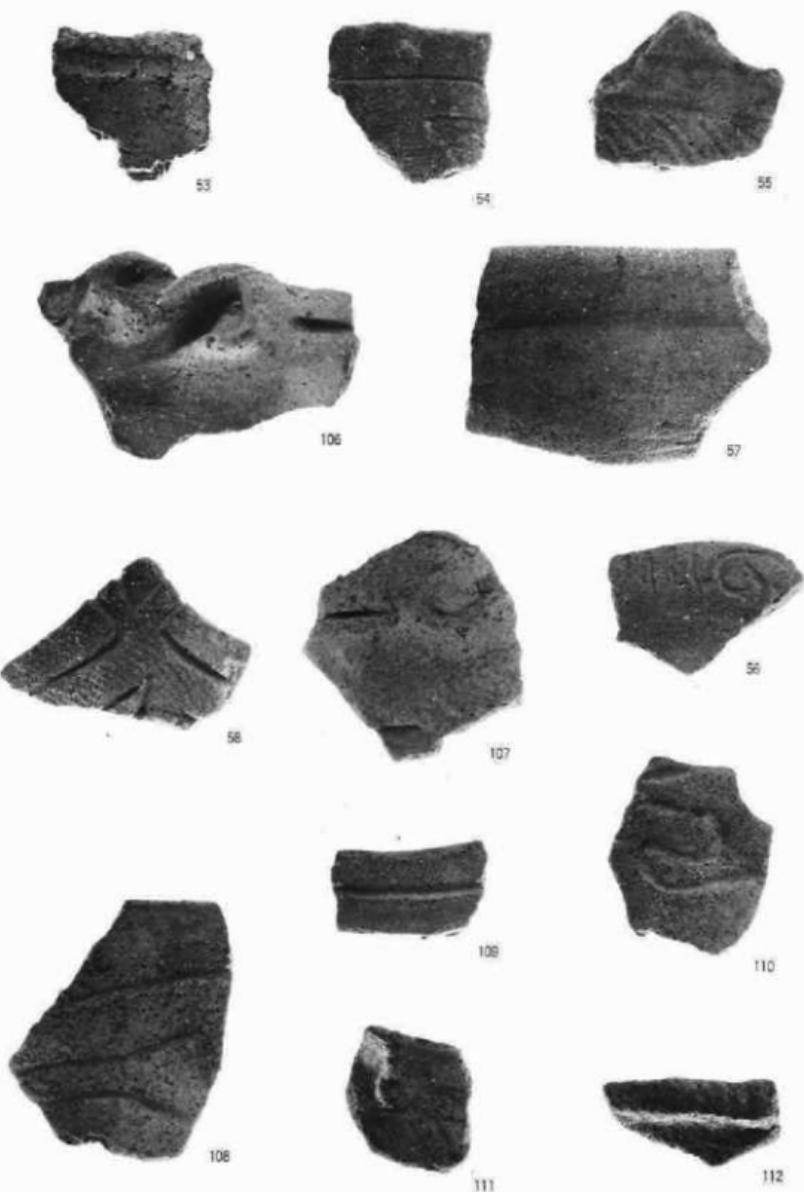


108

出土遺物 繩文式土器（中期）



出土遺物 條文式土器（後期）



出土遺物 碳文式土沿（後期）



113



114



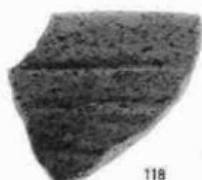
115



116



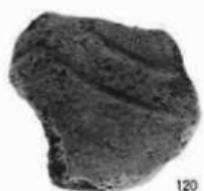
117



118



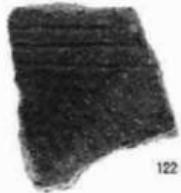
119



120



121



122



123



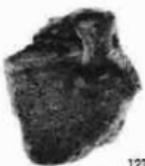
124



125



126



127

出土遺物 條文式土器（後期）



128



129



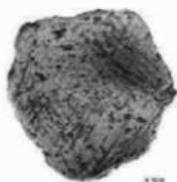
130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



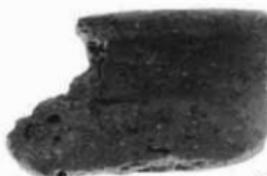
141



142



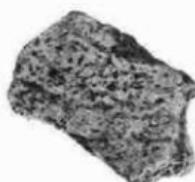
143



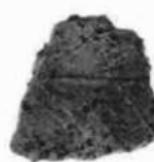
144



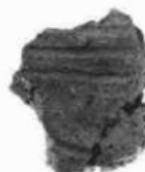
145



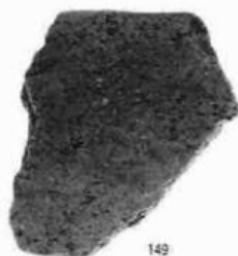
146



147



148



149



150



151



152



153



154



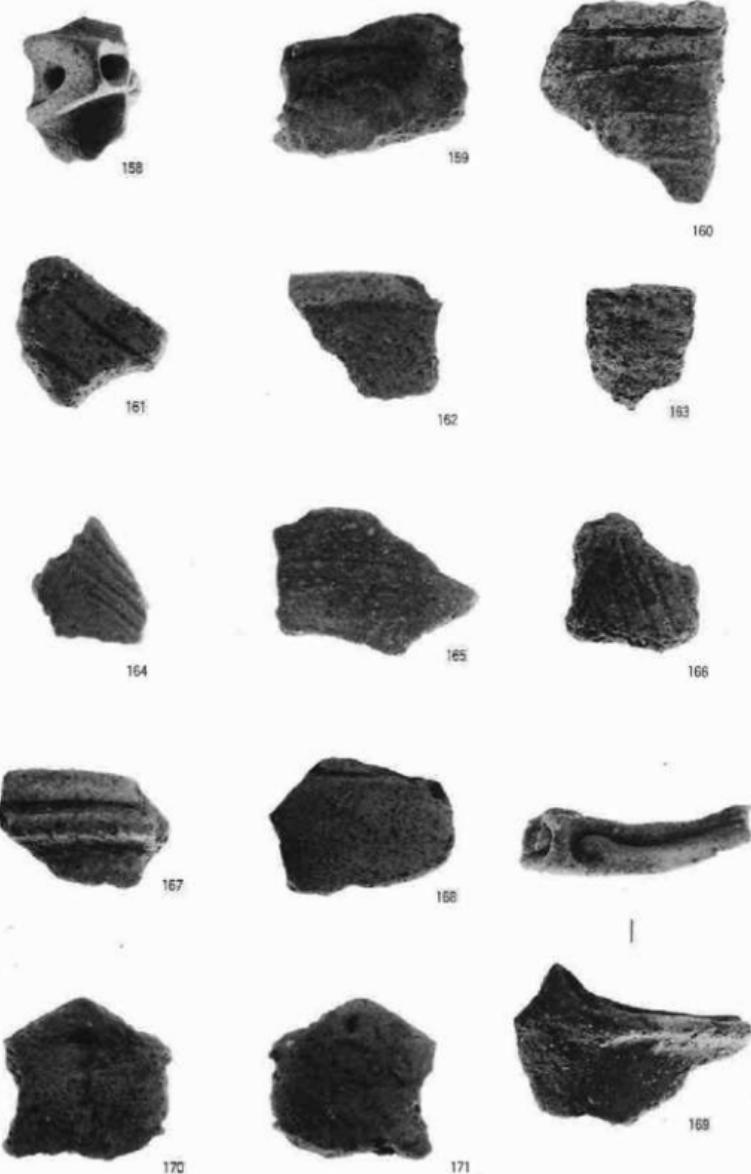
155



156



157



出土遺物 繩文式土器



173



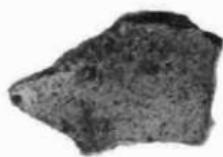
174



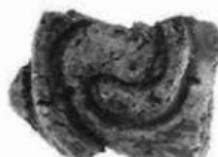
175



176



177



178



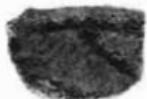
179



180



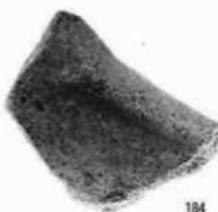
181



182



183



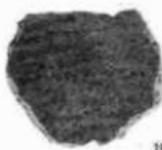
184



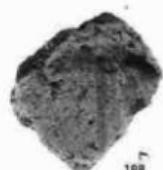
185



186



187



188



189



190



191



192



193



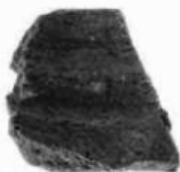
194



195



196



197



198



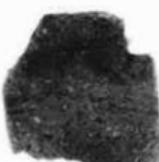
199



200

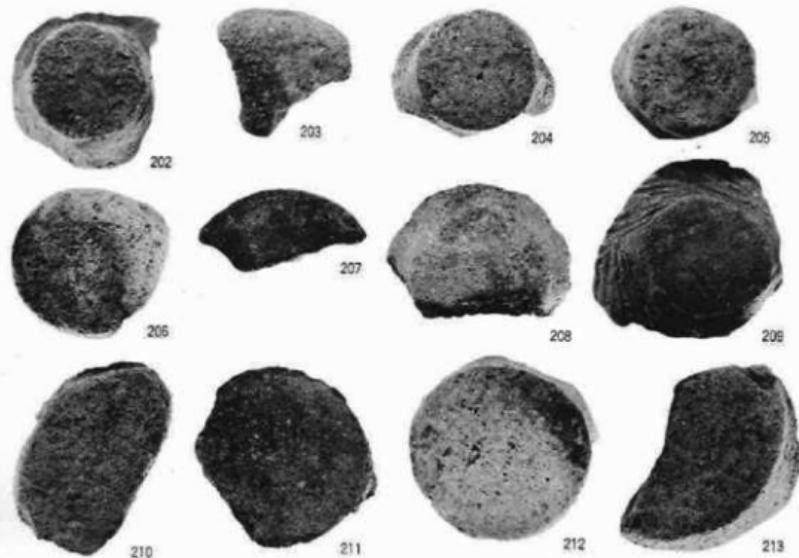
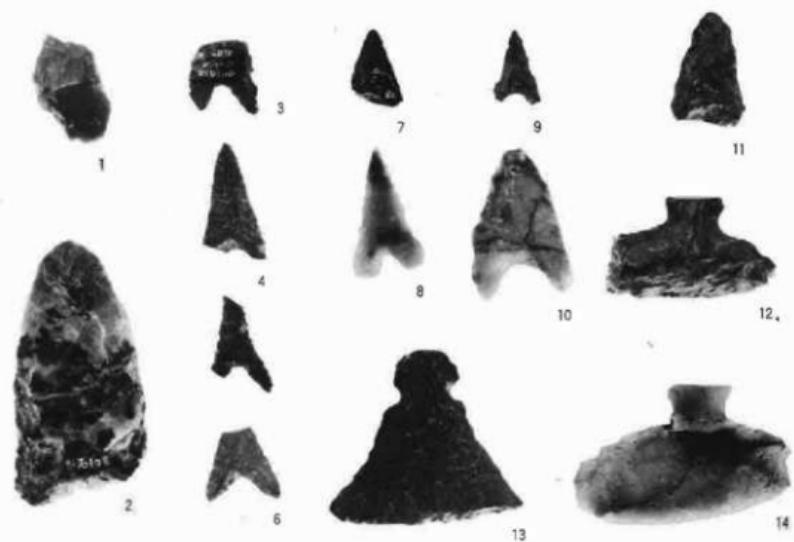


201

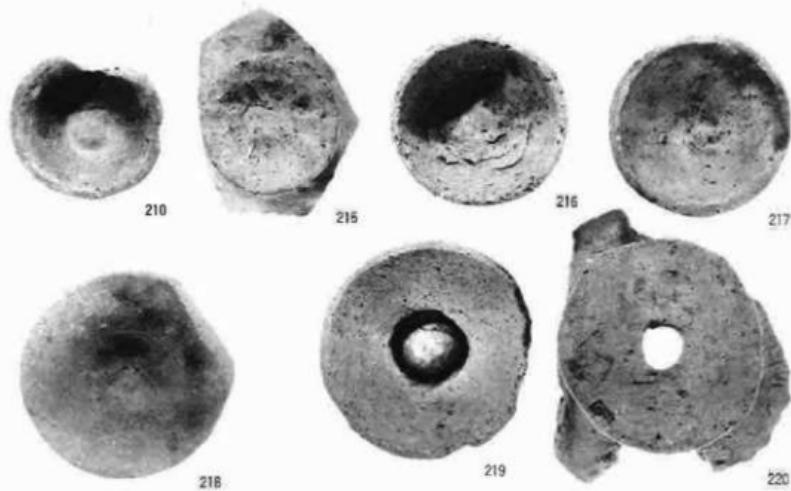


172

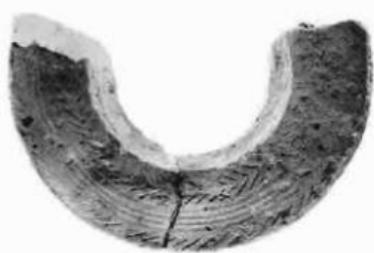
出土遺物 條文式土器



出土遺物 條文式土器（底部）



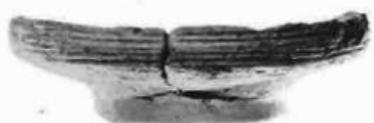
出土遺物 弥生式土器・古式土師器



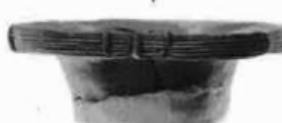
1



1



32



29



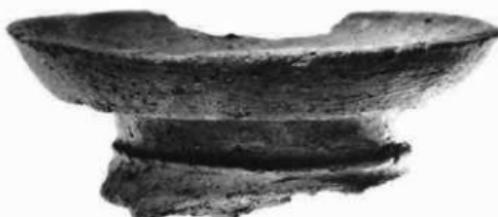
31



62



60



38

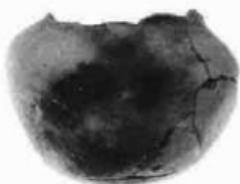
出土遺物 弥生式土器・古式土師器



96



3



221



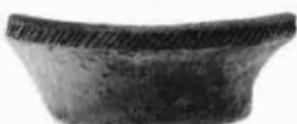
222



95



223



12



6



4

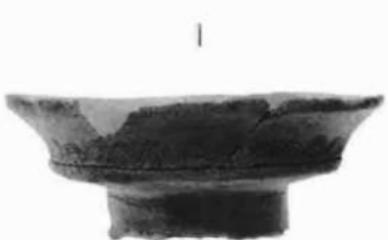
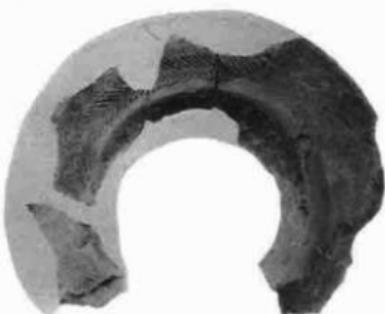
出土遺物 弥生式土器・古式土器



224



225



50

出土遺物 弥生式土器・古式土飾器



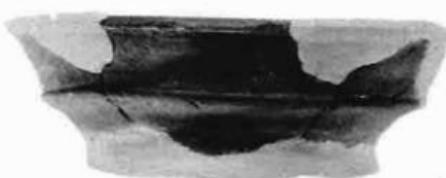
122



126



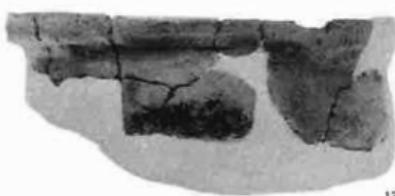
125



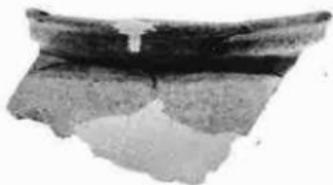
48



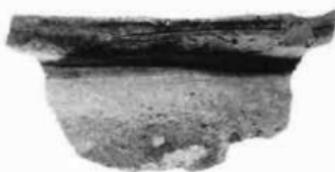
132



132



132



120



121



141



124



227



226



228



171



151



177



92



231

近江町文化財調査報告書第4集

高溝遺跡

1990年 3月

編集行 滋賀県坂田郡近江町教育委員会

印刷 有限会社 真陽社